

2009年1月 6日

人間科学研究科委員長殿

## 伊東 暁子氏 博士学位申請論文審査報告書

下記の審査委員会は、伊東暁子氏の学位申請論文について、人間科学研究科の委嘱を受けて審査を行なってきましたが、2008年12月17日に審査を終了しましたので、ここにその結果を報告します。

### 記

1. 申請者氏名 伊東 暁子

2. 論文題名 家庭の食を介した親子間相互作用の機能と機序

3. 本文

(a) 本論文の主旨

本研究は、子どもの食態度とその背景としての家庭・親子関係に注目し、これらの関係を分析・検討するものである。「食」に関する研究は現在様々な分野で行なわれているが、健全な人々を対象とした研究はまだ十分とはいえず、親子関係との関連についても実証研究という面では多くなされていない。

(b) 本論文の概要

本論文は、全五章から構成され、申請者の行なった4つの研究が含まれている。

第1章では「食」に関連する先行研究を、「健康」、「発達」、「社会」、「文化」の4側面から概観し、「食」がいかに心身の健康に深く関わっているか、また発達段階ごとに食態度が変化する様子、食態度の獲得に家庭や文化が及ぼす影響について述べている。

第2章では、先行研究から導き出される食研究における3つの課題を指摘している。第一に、健常群を対象とした食行動の法則性の検討の必要性、第二に、家族や周囲の人との関係性という立場からの研究の必要性、第三に、家庭における食事の意義に関する実証的な研究の必要性である。これらを踏まえ、本研

究では、子どもが最初に食事を共にする家族という集団に焦点をあて、家庭における食事の意義について検討している。

第3章では、青年期の学生を対象とした調査研究から、食態度と親子関係の関連について検討している。その中の研究Ⅰでは、大学生の食態度を規定している要因を探索的に検討するために、調査を行なった。より具体的には、個人属性、過去および現在の食態度、親子関係に注目し、それぞれの変数間の相関関係および因果関係を検討し、過去の家庭における食事経験が現在の親子関係に影響をおよぼしていることを明らかにした。研究Ⅱでは、食態度を測定する尺度の作成を試みた。研究Ⅰでは、食態度を把握するため、先行研究を参考に項目を収集したものからなる調査を実施し、食態度を測定する尺度の必要性和有効性の検討を含め、この研究Ⅱでは尺度の精査も目的とした。さらに研究Ⅱでは新たなサンプルを用いて、研究Ⅰで得られた結果をより詳細にわたって比較・検討した。この研究の特徴は、過去の家庭での食経験の一つとして弁当に注目し、調査対象者に対して詳しく想起・回答を求めたことが挙げられる。その結果、子どもは母親から与えられた食事に関して評価を行っており、評価が食行動に影響することが示された。またそれらの経験が親子関係に影響を及ぼしており、時期については、時間の経過はあるものの、高校時代の経験よりも幼少期の経験が大きく影響することが明らかとなった。

第4章では、前章での弁当に関する調査の結果を受けて、食態度を形成する家庭の食の一形態としての弁当に注目し、幼少期の食を介した親子の相互作用の親側からの検討および子ども側からの検討をしている。その中の研究Ⅲでは、養育者側にインタビューをすることで弁当作りの実態調査を行ない、親の立場から弁当（食事）が果たす役割について検討した。具体的には、親が弁当をどのようにとらえ、作っているのかについて調べた。その結果、母親は弁当作りを少なからず負担に思いつつも、子どもから出される要望などを参考にしながら、子どもの体調や食欲にあわせて弁当を作っていることが明らかとなった。この4章の研究Ⅳでは、幼稚園で収集した観察データおよびインタビューデータをもとにして、弁当（食事）が果たす役割について主に子どもの側から検討した。その結果、子どもは全般的には与えられた食事に感謝を示しながらも、無条件で受け入れているわけではなく、評価を行なっていることが明らかになった。また、子どもにとって食事場面は滞りなく食べるための多くの課題が存在しており、周囲の大人の要求に応え、これらの課題を達成していくことで、子どもたちは徐々に自己効力感を獲得していく可能性が示唆された。

第5章では、以上の結果から総合的な考察を行ない、食特有の相互作用の特徴を示し、それらを踏まえた上で、子どもにとって家庭の食事とは、食事を食べる場面における親子間の直接的なやり取り（会話、食べ物をよそう、食べさせる等）だけではなく、用意された食事の内容や準備の様子などを通して、親の意図、感情、動機を推測し、自分が親にどのように扱われているかを認識する手段の一つであると位置づけた。特に幼少期は、食物を滞りなく口に運ぶという面では決してスムーズではなく、親の気持ちを汲み取るというわけにはいかないことも多いが、普段何度となく繰り返される食生活の中で、親の自分に対する態度を感じ取り、基本的信頼感を基盤として、親像や自己像が調整・再形成されていく場であると考察している。

#### （c）本論文の評価

「食」は、その意味、文化、社会、文脈、場面、会話などの関連要因が多数あり、まさに人間科学が対象とするテーマに相応しく、本研究は、その「食」という今日のかつ切実な社会問題に対し、発達心理学・健康心理学・心理行動学の視点から、調査研究による数量的研究と観察・インタビュー研究による質的研究の両者を用いて、問題に正面から取り組んだ意欲的な研究である。関連文献についても、社会、文化、発達、健康等の領域について幅広くまとめている。

これらの点を踏まえ、食態度の現状分析およびその規定要因を探索し、食態度を測定する尺度の作成を試み、十分とは言えないが、ある程度の成果を得ている。従来の研究には見られない注目すべき視点として、食経験の一つとして「弁当」に注目し、調査・観察したことが挙げられる。この調査研究をまとめたものは、日本健康心理学会の「健康心理学研究」20巻（2007）に掲載され、日本健康心理学会から2008年度本明記念賞（学会賞）を受賞している。

調査研究に加え、質的研究では、養育者側にインタビューをすることで弁当作りの実態調査を行ない、親の立場から弁当（食事）が果たす役割についての検討と、子どもの側から収集した観察およびインタビュー結果から弁当（食事）が果たす役割についての検討を合わせ、家庭での食経験、食に対する評価、親子関係と食態度の因果関係、食を介した親子の相互作用の機能と機序を示すことに成功している。これらの知見から、幼少期の食態度発達プロセスのモデルを提唱している。本研究から得られた結果は、家庭の食事のもつ機能と構造を捉え、今後の食育のありかたに重要な示唆を与えるものといえる。

本研究が目指した人間科学的観点については、これらの調査研究、観察研究のみから論じることは難しく、本研究で実施した横断的研究に加え、縦断的な研究も必要であり、関連する要因をさらに精査する必要がある。いくつかの課題を指摘することができるものの、食を介しての家庭での相互作用の機能と機序を示せたことの意義は大きく、今後の発展可能性については大いに期待できる研究である。

以上の点を総合的に判断し、本審査委員会は、本論文が博士（人間科学）に相応しい研究であると判断する。

#### 4. 伊東暁子氏 博士学位申請論文審査委員会

主任審査員	早稲田大学教授	博士（人間科学）早稲田大学	鈴木 晶夫
審査員	早稲田大学教授	文学博士（東京大学）	中島 義明
審査員	早稲田大学教授	博士（人間科学）大阪大学	根ヶ山光一